

聖書：ヨシュア記7章16～26節

説教題：私に隠してはいけない

1 罪と赦し

1) アカンの罪の告白

イスラエルは、約束の地カナンに入ろうと
しています。ヨルダン川を越え、エリコを攻
め落とし、順調にここまで進んできました。
次の目標はアイという町です。調査隊の報告
では、簡単に攻め落とすことができそうだと
わかりました。ところが、イスラエルは思い
がけない敗北を喫してしまいます。驚いたヨ
シュアは祈る中で、主から次のような説明を
受けました。7章11節。「イスラエルは罪を
犯した。現に彼らは、わたしが彼らに命じた
契約を破り、聖絶のものの中から取り、盗み、
偽って、それを自分たちのものの中に入れさ
えした。」もし罪をそのままにしておくなら
ば、主はイスラエルとともにいないとも言わ
れました。

早速ヨシュアは主の指示に従い、イスラ
エルの中から罪を取り除く作業に取りかか
ります。まず部族のリーダーが呼び出され、く
じを引いたところユダ部族が残ります。次に
ユダ部族を構成する氏族が呼び出されゼラ
フ人が残ります。そのようなことを繰り返し、
最後にアカンがくじで取り分けられました。
当時、イスラエルの人口は数十万人とも百万
人とも言われています。そんな大集団の中か
らくじ一つで犯人を捜し出したというので
すから、神がこのことを御支配していること
は明らかです。

さて、問題はこのあとです。アカンはヨ
シュアにこう告げております。20節。「ほん

とくに、私はイスラエルの神、主に対して罪
を犯しました。」そう言ってから事細かに、
自分がしたことを供述しております。調べて
みると、そのとおりでした。

2) 赦しはどこに？

みなさんはこれを読んで不思議に思わな
かったでしょうか。と言うのは第一ヨハネ1
章9節にこうあるからです。「もし、私たち
が自分の罪を言い表すなら、神は真実で正し
い方ですから、その罪を赦し、すべての悪か
ら私たちをきよめてくださいます。」

アカンは、包みか隠さず自分が犯してし
まった罪をヨシュアに告白しています。もし
第一ヨハネの言うとおりであるなら、アカン
の罪はこの時点で赦されるはずではないで
しょうか。ところが期待に反して、結末は非
常に悲惨なさばきの場面で終わっていくの
です。アカンが折角罪の告白をしたのに、ど
うしてさばかれなければならないのか。もし
今もこの原則が変わらないのだというのな
ら、罪の告白などばかげたこととなります。
むしろ隠せるものは隠しておいた方がまだ
ましではないかとさえ思ってしまう。

このことをどう考えたらよいのか、今日は
そこに焦点を当てていきます。

2 ヨシュアとアカンの対話

1) 「主に栄光を帰しなさい」

ヨシュアとアカンのやりとりを詳しく見
ます。ヨシュアはまずこう語っています。19

節。「わが子よ。イスラエルの神、主に栄光を帰し、主に告白しなさい。あなたが何をしたのか私に告げなさい。私に隠してはいけない。」

ここでヨシュアが「主に告白しなさい」と語ったところは、「主に賛美をささげなさい」とも訳すことができます。あなたが何をしたのか隠さずに告白すること。それが主に栄光を帰することであり、主を讃美することであると言っているのです。

私はこの箇所を見て、少々驚きました。なにかすばらしいことをして、その結果主に栄光を帰するというのならわかります。何かすばらしいことがあったので、その結果主を讃美する。それが常識であるかのように考えていました。でも意外なことに、ここでは罪の告白が主に栄光を帰することだと言うのです。

口で「主はすばらしい」と言い、「主よ、感謝します」と言ったとしても、それですぐに主に栄光を帰したことにはならない。「主の御名を讃美します」と言っても、それが神に受け入れられるとは限らない。もし主の前に隠したままの罪があるのなら、主は賛美を受け入れないというのです。

良いことばかりを取り上げて、それをもって主に栄光を完全に帰したとは言えません。かえって私たちの目にはマイナスに見えること、隠しておきたいこと、どろどろした思い、そんなことを含めて主の前に告白していく。それが主に栄光を帰することにつながることを覚えたいと思います。

アカン、くじで自分がとりわけられるはずはないと最初安心していたのかもしれませんが、自分が取り分けられてもなお、隠し通すことができるのではと楽観的に考えてい

たのかもしれませんが。だからヨシュアは言います。「私に隠してはいけない。」

ヨシュアはどんな表情でこう言ったのだろうかと考えます。アカンのおかげで、イスラエルは重大な危機に陥ってしまいました。三十六人のいのちが失われてしまいました。普通であれば、怒りに燃えながらなじるような口調でアカンを責めるでしょう。しかしヨシュアのことばをよく見るとどうもそうではありません。「わが子よ」と呼びかけています。その後語ったヨシュアのことばを、新改訳聖書では「なになにしなさい」とあたかも強い命令で語っているかのように訳していますが、原文を見ると非常に丁寧な言い方なのです。「わが子よ。イスラエルの神、主に栄光を帰してください。どうか、主に告白してください。あなたがしたことを私に語ってくれないだろうか。」そんな言い方なのです。

2) 「罪を犯しました」

穏やかに語るヨシュアに対し、アカンは心を開きました。「ほんとうに、私はイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。私は次のようなことをしました」と語り、犯行を詳しく供述していきます。

さきほど、罪を告白することが主に栄光を帰することになると言いました。そうすると、アカンは包み隠さず罪の告白したのですから、確かにアカンは主に栄光を帰したことになります。主に賛美をささげたこととなります。

3) さばき

よかった、よかった。罪を告白したのだからアカンは赦されるはず。私たちはそう期待

します。しかし、結果は私たちの目に残酷と思えるような結末になってしまいます。アカン一人が処刑されたわけではありません。彼の息子、娘、家族は石で打ち殺され、財産はすべて火で焼かれてしまいました。その一部始終をイスラエルが見ております。「一罰百戒」ということばがあります。アカンを厳しくさばくことによって、人々を恐れさせ、アカンのような犯罪が起きないように、みせしめとしてやったのでしょうか。

もしそうならば、やはり旧約の神は恐ろしいということになります。アカンのようになつてはならないと、おびえながら信仰生活を送る。そんなことになります。そのような信仰生活は楽しいでしょうか。もちろん、楽しいはずはありません。常におびえながら生きなければならなくなります。なぜおびえるのでしょうか。アカンが犯した罪、あれは私たちのなかにもあるとを感じるからです。アカンは他人ではありません。まさに自分そのものです。どんなに、「取ってはならない。盗んではならない」と耳で聞いていても、いざとなったらアカンようになってしまう自分を感じています。だから恐くなるのです。

どうして神はこのようなことをされるのでしょうか。アカンは罪を告白したのになぜ厳しいさばきを受けなければならなかったのか、最後にそのことを見ていきます。

3 十字架の意味

1) わざわいをもたらす者に、主はわざわいをもたらす

ヨシュアはアカンとその一族をさばくにあたりこう述べています。25節。「なぜあなたは私たちにわざわいをもたらしたのか。主は、きょう、あなたにわざわいをもたらされ

る。」

ヨシュアはここで大切な原理を語っています。わざわいをもたらす者がいるなら、主はその者に対してこんどはわざわいを与える。これを別の角度から言い換えればこうなります。もし、主からわざわいを与えられた者がいるなら、その人は、人々にわざわいを与えた者であるはずだ。

このことから、イエス・キリストのことを思い起こします。主は、十字架で父なる神からのさばきを受けになりました。主からわざわいを受けたのです。主はゆえなくしてさばく方ではありません。まして、ご自分のひとり子です。よほどの事情がない限り、ご自分のひとり子をさがばくはずはありません。それでも、ひとり子をさばいたのはなぜでしょう。ヨシュアのことばから明らかです。主イエス・キリストは、罪のない方であつたのに、私たちにわざわいをもたらす者という立場を取ってくださったから。

2) アカンのことが二度と起きないように

今日の箇所を読んで、どこに恵みがあるのかと気持ちが暗くなったかも知れません。しかし、ここにも恵みがきちんとあります。

アカンが罪を告白したのに、きわめて厳しいさばきを受けたのはなぜか。納得できない思いがあります。ならば、罪のない方が十字架できわめて残酷なさばきをうけられたことはどうなるのでしょうか。もっと、納得できないことになりませんか。アカンのことを見て、「どうしてこんなひどいことになるのか」と文句を言う前に、主がどのような扱いを受けられたのかを見るべきかもしれません。

旧約聖書にはアカンの他にも多くの厳しいさばきが描かれています。それを読むたび

に、だれでも思うはずです。こんなことがあっているのか。主は私たち以上にそう思われました。だから、救い主が私たちのところに来られたのです。アカンのようなことが二度と繰り返されてはならないと、強い意志を持ってこの方は十字架においてわざわいを引き受けてくださいました。

私たちはこれから何度もアカンのように罪を犯してしまうでしょう。けれども神は言われるのです。「私に隠してはいけない。」罪を告白した者に、わざわいが襲いかかることは絶対にあってはならないのです。なぜなら、主がすべてのわざわいを十字架で引き受けてくださったからです。ですから安心して、この方に弱さを打ち明けて行きたいと思えます。主に栄光がありますように。